

今年で終戦から六十年。本市も昭和二十年八月五日、大空襲を受けて多くの犠牲者を出しました。戦争を経験した人が少なくなる中で、その悲惨さを次世代へ引き継ぐことが大切です。市では空襲を体験した三人による証言ビデオ「空襲の炎の中で」前橋空襲体験者の証言」を作成し、生活課と市立図書館で貸し出しもしていますが、今回はこの三人にインタビューし、紙面で体験談を紹介します（担当は市民編集員・須藤、大沢）。
問い合わせは生活課 890 6236へ。



空襲から一週間後に出征

居城 昇さん(天川原町)

昭和二十年三月九日、米軍が東京大空襲を敢行、四月一日には沖繩本島に上陸を果たし、戦局は急を告げていました。当時、わたしは二十歳で国鉄高崎車掌区に勤務、食糧買い出しの乗客

いました。八月に入り、空襲のうわさが流れていた当日の夜、桑町（現在の千代田町二丁目）にあった家で、父と弟と三人で歓談していると、B29爆撃機の大空襲が開始、不気味な爆音の中、照明弾が光り焼夷弾が雨のように投下されると、市街地は瞬間に火の海、燃え盛る熱風と油臭さの中、県庁方面へ走って逃げました。

にしまった招集令状の無事を確認し一息つきました。いつしか豪雨が降り出し、燃え尽きる市街地を前に、やり切れぬ思いで朝まで立ち尽くしていました。
翌日からは、焼失を免れた弁護士のお宅に仮住まい。十一日、灯火管制下の暗い座敷で別れの杯を交わし、翌日、前橋駅から出陣し、我孫子第八十三連隊に入隊。直ちに九十九里浜の沿岸警備に就き、小学校へ宿営しました。
上陸する米軍の舟艇へ爆薬を抱えて突入する任務の二日間、超低空を飛ぶグラマン戦闘機から幾度と機銃掃射を浴びせられました。被弾は免れました。十五日には終戦の詔勅を拝承。二等兵の任務が終わったのです。

教え子たちを何とかしたい

片野 久子さん(文京町四丁目)

小学校の教員をしていたわたしは、昭和十九年十二月から女子生徒を連れて、勤労動員で製糸工場へ行っていました。午前

八時半から午後四時まで、毎日、真綿掛けの仕事です。生糸でできない二級品の繭を蒸気で蒸してから煮て、くぎに掛けて四角に広げた物を五枚重ねて出来上がり。熱いなべを抱えての作業で、指は白く膨れ蚕のように。乾くと皮が破れてしまつのです。

ら。もし、戦闘機の音が聞こえたら、すぐ田のあぜや側溝へ飛び込むんだよ」と叫んで、走り去る子どもたちの後ろ姿に無事を祈るばかりでした。
男子生徒は松根油の原料になる松の根を掘りに、毎日、赤城山へリヤカーを引いて行き、グラマン戦闘機の大空襲を受けたそうです。元気のよい子どもたちを何とかしなくてはと思つても、どこへも文句が言えず、わめき叫びたい悔しさでいっぱい。毎日、限界の精神状態でした。そうした暮らしかもかわら

ず、食糧は二十日間も遅配。ヨモギの葉にばらばらと米粒を混ぜて煮込んだ汁をすする毎日、大根入りはごちそうでした。
前橋が焼け野原になり、身内学校の同僚、教え子、たくさんの人を失つたのに、わたしは小学生的なところから、戦争を美化することしか教えられてこなかったのです。誰がこんな戦争を始め、誰も正せなかったのか。この世から戦争がなくなるよつ、政治に携わる人と選ぶわたしたちがしっかりしなくてはならないと思います。

決して忘れないため 経験した3人に聞きました



警戒警報が発令されると「みんな家に帰りなさい。解除になつても工場へ戻らなくていいか

いきました。八月に入り、空襲のうわさが流れていた当日の夜、桑町（現在の千代田町二丁目）にあった家で、父と弟と三人で歓談していると、B29爆撃機の大空襲が開始、不気味な爆音の中、照明弾が光り焼夷弾が雨のように投下されると、市街地は瞬間に火の海、燃え盛る熱風と油臭さの中、県庁方面へ走って逃げました。

にしまった招集令状の無事を確認し一息つきました。いつしか豪雨が降り出し、燃え尽きる市街地を前に、やり切れぬ思いで朝まで立ち尽くしていました。
翌日からは、焼失を免れた弁護士の親せき宅に仮住まい。十一日、灯火管制下の暗い座敷で別れの杯を交わし、翌日、前橋駅から出陣し、我孫子第八十三連隊に入隊。直ちに九十九里浜の沿岸警備に就き、小学校へ宿営しました。
上陸する米軍の舟艇へ爆薬を抱えて突入する任務の二日間、超低空を飛ぶグラマン戦闘機から幾度と機銃掃射を浴びせられました。被弾は免れました。十五日には終戦の詔勅を拝承。二等兵の任務が終わったのです。